

神戸から発信する市民公開講座

根治を目指す最新がん治療法④

市民公開講座「根治を目指す最新がん治療法」(神戸から発信する「根治を目指す最新がん治療法」実行委員会主催)がこのほど、神戸大学医学部会館シメックスホールで開催された。がんの現状と最新の治療法

について広く知ってもらうための企画で、今回は5回シリーズの4回目。胃がん、大腸がん、食道がん、そして希少がんの一つである骨軟部肉腫について専門家による講演が行われた。



神戸大学医学部付属国際がん医療・研究センター 整形外科診療科長

河本 旭哉氏

胃や肺、大腸などの内臓や皮膚にできるがんを上皮性悪性腫瘍(癌)といいますが、骨や軟部組織(脂肪、筋肉、神経など)にできるがんを非上皮性悪性腫瘍(骨軟部肉腫)と呼ぶ。

希少がんは人口10万人あたりの年間発生率が6例未満のがんで、骨軟部肉腫のうち骨肉腫は年間10万人に約1人、軟部肉腫は同約3人が罹患し、二つ合わせても日本の成人がん全体の約1%にすぎない。希少がんは、専門医が少ないため診断が難しく、確立した治療方法がないため研究が進まないなどの課題が多く、治療困難ながんの一つである。

希少がんについてもっと知ろう！骨や軟部組織にできるがん／骨軟部肉腫

手術こそが治療の主軸

骨軟部肉腫は肉腫以上で多種多様な、半数は四肢(腕や脚)に発生するが体中のどこにでもできる。一般的ながんは中高年に多いが、骨軟部肉腫は若年層にも多く、小児がんでは約10%を占めている。がん細胞内に、異なる遺伝子同士が融合してできる特殊な遺伝子が発現していることが明らかになってきた。

大きさが5センチ以上で、体の奥深いところにある腫瘍は悪性が疑われる。腫瘍のサイズや形状、骨の変化、神経や血管との関係、転移の状態についてはレントゲンやCT(コンピュータ断層撮影装置)、MRI(磁気共鳴画像装置)、骨シンチグラフィ、PET(陽子放射線断層撮影)の画像でおおよそ診断がつくが、確定診断のためには生検(病理診断)が必要だ。針の先で組織の一部を採取する切開生検があるが、より確実な検査が推奨される。

■希少がんって？

人口10万人あたりの年間発生率が6例未満のがん

希少がんに定義される疾患

- ・肉腫／骨・軟部の肉腫、子宮肉腫、体幹や後腹膜の肉腫など
- ・脳腫瘍／神経鞘腫、星細胞腫、芝突起腫など
- ・皮膚腫瘍／悪性黒色腫、血管肉腫、乳房外パジェット病など
- ・眼腫瘍／涙腺がん、網内リンパ腫、視神経腫瘍など
- ・胸腹部の腫瘍／神経内分泌腫瘍、副腎がんなど
- ・その他／頭頸部のがん、原因不明のがん、聴器がんなど

希少がんを合わせるとがん全体の15~30%

骨軟部肉腫の治療法は他のがんと同様に、手術・化学療法(抗がん剤)・放射線治療が三本柱だ。免疫療法やサブリメントなどの情報があふれているが、ガイドラインに沿った治療の方が有効で、生存率も高い。

中でも手術は最も重要な治療法だ。再発予防のため、腫瘍そのものだけでなく腫瘍の周りで出血し浮腫している反応層と呼ばれる部分と、反応層の周囲にある正常な組織を大きく切り取る広範切除を行う。

術前に腫瘍を縮小したり、術後に再発や転移を予防するため抗がん剤を使う。抗がん剤は骨肉腫の5年生存率を約15%にまで引き上げたが、すべての骨軟部肉腫に有効なわけではない。

放射線治療は骨軟部肉腫にはあまり有効ではないが、腫瘍の縮小と再発予防を目的に手術と組み合わせる場合がある。術前後だけでなく、広範切除で取り出した骨に放射線を照射して、その後体内に戻す術中体外照射という治療法もある。従来のエクウス線より高い治療効果が得られる陽子線、陽子線を用いた放射線治療も行っている。2016年4月に、切開困難な骨軟部肉腫に対して、陽子線治療が公的医療保険の適用を認められた。

がん細胞内には低酸素環境にあり、その環境のままだとがんをさらに悪化させる。神戸大学は二酸化炭素を使って低酸素環境を改善する炭酸ガス経皮吸収療法という治療法の開発を進めており、現在安全性を確認する臨床試験を行っている。

病気を理解することで、患者さんと医療者が協力すると、治療を進める上でも患者さんが何が目標を持つことが病気の治療にとくも大切なことだと考えている。